



## 夜間のたん自動吸引、ALS患者の介護負担軽減 大分協和病院

2010/8/7 21:48 | 日本経済新聞 電子版

全身の筋肉が徐々にまひするALS(筋萎縮性側索硬化症)などの病気で気管切開し、常時人工呼吸器を使用している患者のたんを自動吸引するシステムを、大分協和病院(大分市)が完成させた。

通常、吸引は夜間も2～3時間に1回のペースで必要で、介護する家族は一晩に何度も起きなければならぬなど負担が大きい。日本ALS協会の金沢公明事務局長は今回のシステムについて「大変よいものができた。介護負担の軽減が期待できる」と話した。

同病院の山本真院長によると、医療機器会社「徳永装器研究所」(大分県宇佐市)と連携して約10年前から研究を重ねてきた。人工呼吸器の使用時に、気管内に挿入して空気の通り道を確保する医療器具「気管カニューレ」を改良。気管内からカニューレに入ってくるたんを吸い出すための細い管を設けた。

このカニューレは5月に厚生労働省の承認を受けた。同研究所が開発した既存の医療用吸引ポンプと組み合わせることで、たんを安全に自動吸引できる。ALSだけでなく、脳血管障害などのため、気管切開してカニューレを単独で装着している患者にも使用できる。[共同]

**NIKKEI** Copyright © 2010 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。